

唐話辞書に見られる二字漢語の語釈と近世近代の「あて字」

銭谷 真人 (教育学科)

Explanations of Two-character Chinese Words in “*To-wa*” Dictionaries, and “*Ateji*” in the Edo and Modern Periods.

Masato Zeniya

Department of Education, Kamakura Women's University

Abstract

In this study, I investigated early modern and modern “*Ateji*”, which are thought to have originated from the explanations of Chinese words in “*To-wa*” dictionaries.

In the Edo and modern periods, there were “*To-wa*” dictionaries, and the explanations were looked like “*furigana*” for Chinese words. These Chinese words were sometimes used as “*Ateji*”.

However, Chinese words used as “*Ateji*” were not only new Chinese words that had flowed into Japan in the Edo period, but also included Chinese words that had been used as “*Ateji*” in Japan since ancient times, and Chinese words that can be found in old Japanese dictionaries.

It is thought that these were introduced in “*To-wa*” dictionaries along with the new Chinese words, and that they subsequently became established in Japanese as “*Ateji*” rather than as “*jiongo*”.

Key words : *Ateji*, “*To-wa*” dictionaries, the Corpus of Historical Japanese, Vernacular Chinese, writing system

キーワード : あて字、唐話辞書、日本語歴史コーパス、白話語彙、書記原理

1、はじめに

近世近代に見受けられる多種多様な「あて字」¹、そのルーツを読本に求め、前回の調査²では読本に見られる「あて字」について検証を行った。結果として、やはり読本において発生した「あて字」には、白話語彙（近世中国俗語文学語彙）³由来のものがあること、洒落本・人情本といった近世の戯作のみならず近代の文学作品へと伝播していったものがあること、さらには熟字訓

のように複数の作者によって使用されていたものがあることを、明らかにすることができた。

ただ読本に見られる「あて字」の全てが白話語彙に由来するという訳ではないということも、同時に判明した。なかには古辞書や古本節用集などに見られる「あて字」もあり、伝統的に用いられてきた「あて字」が読本で使用されることによって、一般に浸透し、広まっていったのではないかと考えられるような場合もあった。

そこで今回は、近世の「唐話辞書」を用いて、

白話語彙と「あて字」の関係性について考えていきたい。唐話（江戸時代当時の中国語）の入門書である「唐話辞書」には、多くの白話語彙が採録されている。そして音読みしただけでは意味が分からないそれらの白話語彙には、「読み」と言う形で語釈が添えられている。そのような「読み」から「あて字」が発生したのではないかということである。例えば「花街」⁴という白話語彙を単に「カガイ」と読んだだけでは意味を捉えられないが、それが「くるわ（廓）」と読まれていれば、意味を理解することができる。そして今度は逆に「くるわ」という語を漢字で書くときに、「花街」があてられることで、「花街（くるわ）」という「あて字」が成立した可能性が考えられるのである。

本稿においては、「唐話辞書」に見られる二字漢語の語釈を「読み」とみなし、近世近代においてその二字漢語が「あて字」として使用されていたのかを日本語歴史コーパス（以下 CHJ）を用いて検証していきたい。二字漢語に限定したのは、CHJ において「書字形出現形」で検索するためである。近世近代、具体的にはこれまでの研究でも用いた「洒落本コーパス」「人情本コーパス」「『太陽』コーパス」において「あて字」の用例が見られるかを、まず調査する⁵。

その上で、それらの二字漢語が「白話語彙」であるのかの確認を行う。「読み」と「漢語」の両面から、近世以前の用例があるかを『日本国語大辞典』（以下『日国』）を用いて確認し、場合によっては『唐話用例辞典』⁶も参照する。

以上のように第一に唐話辞書由来と考えられる「あて字」が読本以外の近世の作品や近代の雑誌にも見られるかを確認し、第二にそれらの「あて字」が「白話語彙」由来であるかを検証する。

それによって唐話辞書が近世近代における「あて字」の発生において果たした役割、ひいては白話語彙が「あて字」に対して及ぼした影響について考察していきたい。

2. 検証方法について

今回の検証においては『唐話辞書類集』⁷を底本

として用いた。その中から二字漢語の用例を多く採集できる辞書として、『唐話纂要』『唐音和解』『訳通類略』を対象とした。以下、各辞書の解題は『唐話辞書類集』における長澤規矩也の解説による（旧字体は新字体に改めている）。

『唐話纂要』は長崎の唐通事岡島冠山の著作で、享保元年（1716）刊、底本は同三年（1718）の増補本である。「当時最も流行した唐話の教科書で、巻一から巻三の前半までは、二字至六字の語句に、江南音を傍注し、和訳を下に加へ（中略）巻五は類書の如き内容分類の語彙を列し」（第六集解説）とある。「興趣^{ヒンツユイ} オモシ」のように、中国語読みが振り仮名で、語釈が割注で示される。本調査においては巻一から「二字語」全てと、巻五から汎用性の高い「親族」「器用」の項目の内の二字漢語を用例として採集した。近世において広く流布していた唐話辞書であるために調査の対象とした。

『唐音和解』の底本は享保元年（1716）刊の初印本で、「巻上は乾坤等八門に分け、上方に唐話、その右旁に片仮名で発音、各下方に漢字で訳語、その左旁に片仮名で和訓を加へ」（第八集解説）とある。「霎時^{ヤアスウ} 片時^{シバワク}」のように、二字漢語に対してまた別の漢語で意味を説明しようとしている。二字漢語の右の振り仮名は中国語読みだが、説明用の漢語の左の振り仮名は、字音も字訓もあり、例で示したように「当て読み」の場合もある⁸。本調査においては巻上から汎用性の高い「人品門」「器用門」「言語門」の項目の内の二字漢語を用例として採集した。二字漢語を別の漢語で説明し、さらにその読み方も特殊である（字音や字訓に基づかない）場合もあり、特徴的な唐話辞書であるために調査の対象とした。

『訳通類略』は岡島冠山から唐話を学んだ岡孝祖によるもので「冠山の唐話纂要所収の語彙と共通する所はあるが、そう多くはないのが本書の特色である」（第十八集解説、鳥居久靖による紹介より）とある。ただ本調査においては、第十八巻所収の寛政年間写本ではなく、第十九巻所収の明治二十年代写本における「二字語」の項目を用いた。書式は『唐話纂要』とほぼ同様で、「冷笑^{レンスヤウ} アサワラヒ」のように中国語読みが振り仮名で、語釈が小書き

で示される。ただし「茶碗」のように意味が自明であるとみなされたと思われる二字漢語は、語釈が省略されていることがあり、対象としなかった。『唐話纂要』には掲載されていない語彙が含まれていること、近代において唐話を学ぶために写された辞書であることから、近世の唐話辞書の補完的なものとして、調査の対象とした。

以上の唐話辞書の中から採集した二字漢語を、まずはコーパス検索アプリケーション「中納言」を用いて、CHJ から用例を検索した。唐話辞書の語釈で説明されている意味と一致する「あて字」が洒落本、人情本、『太陽』に見られるかを、まず確認するためである。唐話辞書の語釈はあくまで意味を示すものであり、本来は読みを示すものではないので、「あて字」の読みと完全に一致することは難しい。そこで類義語の「あて字」として使用されていないかについても、確認を行った。

中納言で CHJ から用例を探す方法としては、唐話辞書から採集した二字漢語を書字形出現形で検索する。前述の「興趣【おもしろい】」「霎時【しばらく】」「冷笑【あさわらひ】」（以下唐話辞書の二字漢語を本稿では「二字漢語【語釈（片仮名を平仮名に改めた）】」のように例示する）であれば、「興趣」「霎時」「冷笑」を検索対象とする。その際には旧字体も併せて検索する（「鋼鉄【はかね】」であれば「鋼鐵」でも検索、『太陽』コーパスは旧字体表記のため）。また検索動作「副本文」を「副本文を検索対象に含む」に設定する。CHJ は漢字列が「あて字」と判断される（語形と振り仮名が一致しない）場合、二重に形態論情報が付与されている場合があり、「副本文」の方でヒットすることがあるからである。検索結果の振り仮名を全て確認し、唐話辞書に見られる二字漢語が、洒落本、人情本、『太陽』において「あて字」として使用されていたかどうかを調査した。

検索対象とした二字漢語の延べ数（同じ漢語であっても語釈が異なる場合があるので、別に検証した）は、『唐話纂要』が1285語（「二字語」760語、「親族」102語、「器用」423語）、『唐音和解』が226語（「人品門」24語、「器用門」16語、「言語門」186語）、『訳通類略』（「二字語」のみ）348語の計1859

語である。

この1859語を CHJ で検索し、唐話辞書の語釈に使用されている語とほぼ同じ語が二字漢語の「振り仮名」として使用されているものは「○」、語釈に使用されている語の類義語が二字漢語の「振り仮名」として使用されているものは「△」、二字漢語の使用は見られるが該当する「振り仮名」が見られないものは「×」、二字漢語自体の使用が確認されないものは「なし」として分類した。

そして「○」または「△」と判定した延べ165語について、さらに『日国』（オンライン版）で検索を行った。その際には「読み（唐話辞書の語釈、CHJ の振り仮名）」と「二字漢語」の両面からアプローチした。

「読み」については原則として唐話辞書の語釈として用いられている語で検索したが（「霎時【しばらく】」であれば「しばらく」で検索）、語釈が説明的な言い回しであったり複合語であったりした場合（「奸計【いつはりのはかりこと】」など）は、CHJ の振り仮名に見られた類義語で検索（CHJ に「奸計（たくらみ）」という用例があれば「たくらみ」で検索、以下 CHJ の用例については「二字漢語（振り仮名）」のように例示する）を行った。そしてそれらの「読み」の『日国』の表記欄において、二字漢語の表記と合致する表記が見られるかを確認した。表記欄に近世以前の古辞書や古本節用集の記載があれば、既にその二字漢語の表記が「読み」と対応していたということになり、唐話辞書における語釈は先行するそれらの辞書を参考に書かれた可能性が考えられるのである。

二字漢語については CHJ の書字形出現形で検索した語をそのまま『日国』でも検索した。二字漢語についても検索した理由としては、漢語自体の日本語における出現時期を調べることにある。

『日国』の表記欄において、漢語自体が近世以前の古辞書・古本節用集に見られなければ、近世になって新しく入ってきた漢語、すなわち「白話語彙」である可能性が高いと判断できるのである。

3、検証結果について（表凡例）

以上のように検証した結果をまとめたものが、稿末の表①～③である。表①～③は調査結果に基づき以下の基準によって分類している。

- ①古くから「あて字」として用いられてきたもの（近世以前の古辞書・古本節用集に「あて字」の用例が見られるもの）
- ②漢語自体は古くから存在したが、既存の語彙の「あて字」として用いられるようになったもの（近世以前の古辞書・古本節用集に漢語の用例のあるもの、または近世以前の和書に漢語の用例のあるもの）
- ③新しく入ってきた漢語が既存の語彙の「あて字」として用いられるようになったもの（漢語としての使用例が近世以前に見られないもの、すなわち本稿で定義する「白話語彙」由来の「あて字」と考えられるもの）

CHJや『日国』において実際に調査に用いた語やその調査結果については、以下のように表に記載した。

◇「漢語」は唐話辞書に見られた二字漢語を示す。旧字体などの異体字で記載されているものは現行字体に改めている。この漢字表記を用いて、中納言で書字形出現形検索を行った（『太陽』コーパスのみ旧字体を使用）。また『日国』においても漢語自体の出現時期を特定するために検索を行った。

◇「語釈」は唐話辞書に見られた「漢語」に付された意味の説明部分である。清濁や仮名遣いは原文のままで、原文にならって片仮名で表記している。なお『唐音和解』については、「ウナヅク（頂傾）」のように、括弧で二字漢語（ここでは「点頭」）の意味説明に使用された別の漢語についても記載している。

◇「唐話辞書」は「漢語」の掲載されている辞書名である。『唐話纂要』『唐音和解』『訳通類略』のいずれかになる。

◇「洒落本」「人情本」「太陽」は、CHJで「漢語」を書字形出現形検索した結果である。検索の結果

得られた用例の「振り仮名」に注目し、振り仮名と「語釈」に一致が見られる場合は「○」として、語形の違いなどは括弧内に示した。振り仮名の中に語釈の類義語が存在する場合は「△」として、具体的な語を示した。「×」は「漢語」の用例は見られたが、振り仮名に「語釈」と合致するものがない場合で、「なし」は「漢語」の用例自体が見られなかった場合である。「判定」は一つでも「○」が含まれていれば「○」、「○」が含まれず「△」が含まれる場合は「△」とした。なお表①～③は「判定」が「○」か「△」、すなわち唐話辞書の二字漢語が「あて字」として使用されていた可能性があるもののみを取り上げている。

◇「日国検索語」は『日国』で「漢語」の「読み方」で検索する際に用いた語である。原則として「語釈」を「漢語」の「読み方」とみなして検索を行った。ただし「判定」が「△」の「漢語」の内、「語釈」で検索することが難しい場合や、CHJにおいて複数のコーパスで同じ振り仮名が見られた場合には、CHJの用例の振り仮名で検索を行ったものもある。そのために実際に検索を行った語として示した。

◇「表記欄（日国検索語）」には、「日国検索語」で検索した結果、表記欄に「漢語」が見られた辞書名を示した。「×」は「漢語」を掲載した辞書が存在しなかった場合で、「なし」は表記欄自体が見られなかった場合である。なお辞書名には以下の略称を用いた。

字…新撰字鏡、和…和名類聚抄、色…色葉字類抄、名…類聚名義抄、下…下学集、和…和玉篇、文…文明本節用集、伊…伊京集、明…明応五年本節用集、天…天正十八年本節用集、饅…饅頭屋本節用集、黒…黒本本節用集、易…易林本節用集、書…和漢音釈書言字考合類大節用集、へ…へボン編和英語林集成（再版）、言…言海

◇「漢語読み」は、「漢語」を『日国』で検索した際の字音読みである。例えば「小兒」であれば、「しょうに」と「しょうじ」の二通りの字音読みがあるが、「しょうに」と読む方で検索したことを

示す。字音読みが複数ある場合は、初出年代が古いものや表記欄が存在するものを優先している。

◇「表記欄（漢語で検索）」は「漢語読み」で「漢語」を検索した結果の『日国』の表記欄である。記載方法は「表記欄（日国検索語）」と同様である。なお表②については、表記欄で中世以前の使用が確認されなかった場合、『日国』の用例の初出例を挙げている。

◇表②には上記の項目以外に、参考として「用例のみ」の項目を設けた。『日国』の表記欄に「漢語」の記載がなく、代わりに近世以前の『日国』の初出例を挙げたものを「○」で示した。

◇表③には上記の項目以外に、参考として「全CHJ」「日国近世以後」の項目を設けた。「漢語」の字音語としての使用実態を把握するためである。「全CHJ」は、「漢語」そのものが近世以前に見られるかを、現在CHJに含まれる全コーパス（データバージョン 2024.03）から書字形出現形検索を行った結果である。中世以前から字音語としての使用例があれば「○」、近世以後から字音語としての使用例があれば「△」、字音語としての使用例が全くなければ「×」として分類を試みたが、結果「△」と「×」のみであった。また『日国』の用例において近世以後の字音語としての使用が確認された場合については、「日国近世以後」に「○」で示した。

4、グループ別の考察

表①～③で分類した各グループについて考察していきたい。

4-1、表①古くから「あて字」として用いられてきたもの

表①を参照してもらいたい。『日国』の表記欄における記載があり、古くから「あて字」として用いられることがあったと考えられる二字漢語である。

これらの漢語の語釈に際しては、近世以前の古辞書や古本節用集の「振り仮名」が援用された可能性がある。唐話辞書を編纂するような知識人にとっては、既知の二字漢語だったのではないだろ

うか。語釈も一単語で示され、「振り仮名」のようなものが多い。元々「あて字」として使用されることのあった漢語だったが、近世に唐話を通じて広く知られるようになり、以降「あて字」として一般的にも用いられるようになったことが考えられる。

「明日【あす】」「剃刀【かみそり】」「昨日【きのふ】」「今日【けふ】」など、現在でも熟字訓として通用するものも含まれていた（「剃刀」以外は現行の常用漢字表「付表」⁹に記載されている）。

「周章【あはてる】」「點頭【うなづく】」などは、現代では漢語自体に馴染みがなく、一見すると「白話語彙」のような印象を受ける¹⁰が、近世以前の古辞書・節用集において既に見られる。試みに「點頭」を『唐話用例辞典』で引いてみたところ（「周章」は立項なし）、『水滸伝』における使用が確認された。漢語自体は古くから存在していたが、近世の日本で広く流通していた四大奇書などの白話小説において使用されたことにより、唐話辞書においても掲載され、「うなづく」という意味で一般の読者にも漢語自体がよく知られるようになったものと考えられる。そして今度は「うなづく」を漢字で書こうとした時に、近世以降は「點頭」という漢字があてられるようになったのである¹¹。

「可惜【ノコリヤシヒ】」「如何【ナントシタカ】」「遮莫【ア（サ）モアラハアレ】」については、『日国』において漢語としての使用が認められなかった。これらは漢文訓読語として、専ら「訓読み」されてきたことが考えられる。試みにCHJにおいて全コーパスから書字形出現形検索を行った結果、やはりいずれも字音語としての使用は確認されなかった。「可惜（あたら）」「如何（いかん）」「遮莫（さもあらばあれ）」と漢文脈の中で訓読みされてきたと考えられるこれらの二字漢語であるが、「可惜」「遮莫」については、唐話によってこの二字漢語が広まったことにより、和文脈における使用が確立された可能性が高い。『日国』においては辞書以外で近世以前の用例が見られず、CHJにおいても「可惜（あたら）」が人情本『春色梅児与美』三編巻の七（1833）初出、「遮莫（さもあら

ば)」が人情本『恋の花染』初編中(1832)初出だからである。このように漢文訓読の際に「訓読み」されてきた二字漢語が、今度は和文脈の中でその「訓読みされた語」にあてられる「あて字」として用いられることがあったと考えられる。このような事例については、今後訓点資料を用いた漢文訓読の観点からの検証が必要となる。

4-2、表②漢語自体は古くから存在したが、既存の語彙の「あて字」として用いられるようになったもの

表②を参照してもらいたい。唐話辞書の二字漢語について、その語釈やCHJに見られた語釈の類義語(二字漢語で書字形出現形検索した結果の振り仮名)を『日国』で検索したところ、表記欄では近世以前の辞書にその二字漢語が見られなかったが、漢語としての使用自体は近世以前から見られたものである。すなわち漢語自体は古くから日本語の中に存在していたが、その漢語が「あて字」として用いられるようになったのが、近世以降だと考えられるものである。そしてその契機となったのが唐話における使用ではないかということである。

例えば「冷笑【あざわらひ】」について見てみると、「冷笑(れいしょう)」という漢語自体は、『日国』の表記欄で『文明本節用集』における記載が確認され、また『日国』の用例の初出は『空華集』(1359~68頃)で、さらに遡ることもできる。近世以前から「冷笑」という漢語自体は日本語の中に存在していたことになる。それが唐話辞書において「あざわらい」と説明されることによって、今度は「あざわらい」という語に漢字をあてる時に「冷笑」という漢語が用いられるようになったと考えられるのである。この「冷笑(あざわらい)」という「あて字」については、以前の読本における「あて字」の調査¹²⁾においても曲亭馬琴の『高尾船字文』(1796)、『小説比翼文』(1804)での使用が確認された。なお『訳通類略』自体は明治期の写本であるが、このことから白話小説の訳語由来、すなわち唐話辞書の影響である可能性が高い。

延べ95語の内、延べ45語(「祖父」「祖母」「悪心」「歓喜」が重複しているので、異なり語数では41語)が「判定」が「○」であり、唐話辞書の二字漢語の語釈に用いられていた語がほぼそのままCHJにおいて該当する二字漢語の「振り仮名」として用いられていた。中には「寡婦(ごけ)」「沈吟(しあん)」「妓女(じょろう)」「灯籠(ちようちん)」「農夫(ひやくしやう)」「平常(へいぜい)」のように、「後家」「思案」「女郎」「提灯」「百姓」「平生」といった別の漢語に二字漢語をあてていた「あて字」も見られた。字音語については、そのまま本来の漢字で書けば良いはずであるが、このような「あて字」が生まれた背景にはやはり唐話辞書の語釈が重要な役割を果たしたものと考えられる。まず唐話辞書で取り上げられているこれらの二字漢語は、近世以前から用例が認められるものとは言え、一般的にはあまり馴染みのないものであったのであろう。それらの二字漢語について語釈を施す際に、簡潔に説明できる適当な和語がなかった場合は、誰もが知っている漢語を用いて説明を試みたのではないだろうか。それらはおそらく漢字があまり身近ではない(頭の中で漢字に変換できない)人であっても、日常的に用いていた漢語であったものと思われる(あるいは漢語という認識自体希薄だったかもしれない)。そうでなければ語釈に使われている語をまた調べなくてはならない。そのようにして唐話辞書の二字漢語にまた別の漢語が説明として用いられると、今度はその別の漢語を漢字で書こうとした際に、字音に基づかずに、唐話辞書の二字漢語の方が用いられることがあったのではないだろうか¹³⁾。

字音による漢語としての使用が『日国』の表記欄に見られなかったものは、「用例のみ」に「○」で示したが、それらの初出例は、『万葉集』『続日本紀』『東寺百合文書』などの漢文脈であることが多かった。あくまで初出例であり、そのまま漢文脈のみに用いられたとは限らないが、漢文脈で使われることが多かったために、馴染みのない漢語であった可能性もある。唐話辞書によって知られるようになったこのような漢語は、当初は字音語ではなく(唐話辞書の「音読み」は字音ではな

く当時の中国語読みであったこともあり)、語釈に対応した「あて字」として用いられるようになったのではないだろうか。例えば「許多」は『訳通類略』に「あまた」、『唐音和解』に「たくさん」の語釈があるが、洒落本においては「あまた」「そこばく」、『太陽』においては「あまた」「おほく」「そくばく」「たくさん」の「あて字」として使用されている。なお「許多」を全コーパスで検索しても近世以前の用例は見られなかった。また「そこばく」「そくばく」を『日国』で検索すると、表記欄に近世以前の辞書で「許多」が掲載されているものがあつた。漢文訓読においては「許多」が「そこ(く)ばく」と「訓読み」されることがあつたものと思われる。

4-3、表③新しく入ってきた漢語が既存の語彙の「あて字」として用いられるようになったもの

表③を参照してもらいたい。唐話辞書の二字漢語ついて、その語釈やCHJに見られた語釈の類義語を『日国』で検索したところ、表記欄では近世以前の辞書にその二字漢語が見られず、漢語としての使用自体も近世以前には見られなかったものである。すなわち漢語自体も近世になってから流入したもの(本稿で定義するところの「白話語彙」)であり、未知の漢語の語釈から発生したと考えられる「あて字」である。念のために全コーパスで漢語自体の使用例がないか検索してみたところ、あつても近世以降の使用例のみであつた。また『日国』の初出例も全て近世以降のものであることを確認している。なお『日国』については漢籍における使用例が確認されるものがあつた。「側室」「女婿」¹⁴は『漢書』に、「午飯」¹⁵は蘇軾「漱玉亭詩」(北宋)に用例があるが、これらも本稿においては「白話語彙」とみなしている。また「吃驚」「連累」¹⁶は清代の白話小説『紅樓夢』に、「青年」は明代の文言小説『剪燈余話』に用例があるが、これらは時代的にも江戸時代当時の中国語として用いられていたものが伝わってきた可能性が高く、やはり「白話語彙」とみなした。

「漢語」を見てみると、表①と表②に比べて、現

代ではあまり目にするものがない漢語が目立っている。「怎生」「愚鹵」「傍辺」など、『日国』に立項されていない漢語もあつた。また全コーパスで検索しても、近世以降も漢語としての用例が見られないものも存在した。これらの漢語は唐話辞書の語釈によって、それに相当する語の「あて字」として一時期使用されたが、漢語の方が定着しなかったために、「あて字」としての使用も完全には定着しなかった可能性がある。ただ「抽斗(ひきだし)」などは、全コーパスでも漢語としての使用が確認されなかったが、「あて字」としての使用は明治・大正期で49例(「抽斗(ひきだ)し」3例含む)にのぼり、近代においては「熟字訓」のように広く用いられていたと考えられる。動詞「引き出す」との区別のために用いられていた可能性もあるが、このように広く用いられていた「あて字」が現在では見られなくなった原因とその変遷については、今後の課題となる。

延べ47語の内、延べ23語(「煙管」が重複しているので異なり語数では22語)が、「判定」が「○」であり、唐話辞書の二字漢語の語釈に用いられていた語がほぼそのままCHJにおいて該当する二字漢語の「振り仮名」として用いられていた。これらの二字漢語は漢文脈を含むそれまでの日本語に使用されてこなかった「未知の漢語」であり、特に唐話辞書の語釈に用いられた語彙と漢字表記の結びつきが強かったものと思われる。漢語の字音語としての読み方自体が定かではないので、その漢語を覚える際には、語釈を「熟字訓」のようにして覚えたのではないだろうか。そして「熟字訓」のようにその漢語が「あて字」として用いられるようになったものと思われる。「漏斗(じょうご)」のように、語釈が別の漢語の字音語である場合は、前述のように、「上戸」と字音に基づかずに、「漏斗」の方が「あて字」として用いられるものも見受けられた。

一方で語釈の語彙がそのまま「あて字」として用いられていない漢語も同程度存在した。「怎生【なんとしたか】」「準備【と、のゑそなゆる】」などは、まさに「語釈」であり、このような書き方のものは、別の唐話辞書などにおいて一語で説明

されたものの「あて字」として用いられるようになったものであろう。また「側室【をへや】」の「おへや」などは多義的であり、元の漢語が未知語であるので、字面から単に「部屋」の意味で捉えられかねない。その漢語の意味がまだ周知されていなかった時期においては、唐話辞書の語釈が一語でかつ一義的であることが、「あて字」として用いられるようになる条件であったと思われる。

また「霎時【しばらく】」のように、そのまま「霎時（しばらく）」として使われる上に、「霎時（しばし）」としても使われる漢語も存在した。「霎時（しばし）」は馬琴の読本『松浦佐用媛石魂録』に用例があることが『唐話辞書類集』に記載されている。『日国』の「しばし」の語誌には「中世以降になると『しばし』は雅語としては残るが、口語としては衰えて、『しばらく』が専用されるようになる。」とある。『唐音和解』の語釈は口語的に「しばらく」と説明されているが、読本においては文語的な「しばし」の「あて字」として「霎時」が用いられたものと考えられる。人情本における「霎時（しばし）」の使用例をCHJで確認すると、やはり11例全てが文語的な地の文における使用であった（人情本の会話文は口語的）。また「霎時（しばらく）」の『太陽』での使用例を確認したところ、2例であったが、いずれも言文一致体の会話文における使用であった。「霎時」は「しばし」「しばらく」どちらの「あて字」としても用いることができたのである。これは「しばし」と「しばらく」どちらでも意味は同じで、文体の差による使い分けだったからであろう。前述の「許多」も複数の語の「あて字」として使用されるが、同様の事情であったと考えられる。

5、おわりに

『日国』の「しかん（只管）」の語釈には、「『ひたすら』に当てた『只管』の音読語。」とある。「白話語彙」の「只管」が、唐話辞書において「ひたすら」と語釈され、その後「ひたすら」の「あて字」として「只管」が用いられるようになった、そして今度は「只管（しかん）」という漢語として

「ひたすら」の意味で使用されるようになったと考えられるのである。

近世において人々が未知の漢語に出会った時、字音語としてそのまま覚えるのではなく、対応する意味すなわち語釈（時にそれはまた別の漢語である場合もあった）で覚えることが、行われていたのではないだろうか。「白話語彙」のように、個々の漢字の意味からだけでは漢語全体の意味が想像できない、またそもそも個々の漢字の意味自体が不明瞭な場合、この手段は有効である。そして今度はその「語釈」の「あて字」としてその漢語が用いられるようになり、もはや「未知」ではなくなったその漢語は、字音語としても使用されるようになったという筋道が考えられるのである。

そしてこの「未知の漢語」は近世になってから日本に入ってきた新しい漢語「白話語彙」に限られなかったのである。既に「あて字」として使用されることのあった漢語や、近世以前から字音語としての使用が認められる漢語（主として漢文脈において使用されてきたと考えられるもの）も、唐話辞書において紹介されることがあった。唐話辞書の編者が、白話文学ではよく用いられるが、当時の日本人にはあまり馴染みのない漢語であり、語釈が必要であると考えたのであろう。このように「白話語彙」以外からも唐話辞書を通じて「あて字」が発生したものと思われるのである。

本稿においては近世以降に中国から流入した新しい漢語を「白話語彙」と定義したが、表①～③までに示した全ての漢語を白話語彙とみなしても良いかもしれない。これらは唐話辞書を通じて江戸時代当時の中国語として紹介された漢語であり、それが契機となり日本語に「あて字」として定着したと考えられる漢語である。これらの漢語は唐話辞書（あるいはそれに基づき振り仮名が施された白話小説）を通じて読本において用いられるようになり、さらに読本を通じてそれ以降の近世近代文学に用いられるようになったと考えられるが、「あて字」として使用している戯作者や近代の文学者にとっては、白話語彙という意識だったのではないだろうか。

本稿においては、近世近代の「あて字」のルーツを近世の唐話辞書に求めたが、表①で示したような「あて字」については、さらに遡ることができそうである。漢文訓読において発生したものと思われるが、今後訓点資料からの検証が必要となる。

また近世近代に用いられてきた多くの「あて字」が現代では影を潜めている。以前の調査において近世近代においては「あて字」が標準的な表記であったと考えられる語が見受けられた¹⁷が、それが何故用いられなくなったのか。その原因についても今後考察を試みたい。

表① 古くから「あて字」として用いられてきたもの

唐話辞書における記述			CHJ による漢語の各コーパスの検索結果				日国による漢語の語釈または読みの検索結果		日国による漢語の検索結果	
漢語	語釈	唐話辞書	洒落本	人情本	太陽	判定	日国検索語	表記欄 (日国検索語)	漢語読み	表記欄 (漢語で検索)
翌日	ツキノ日	唐話纂要	△(あくひ)	△(あくひ)	△(あくひ)	△	あくるひ	色・文・伊・書	よくじつ	下・文・明・天・饅・黒・易・書・ へ・言
明日	アス	唐話纂要	○	○	○	○	あす	色・名・天・言	みょうにち	文・易・書・へ・言
可惜	ノコリヲシヒ	唐話纂要	なし	△(あたち)	△(あたちをい)	△	あたち	色・名・伊・書・へ	日国なし	日国なし
周章	アハテル	唐話纂要	○	○	○	○	あわてる	色・名・伊・へ・言	しゅうしょう	色・下・文・伊・明・天・饅・黒・ 書・へ・言
如何	ナントシタカ	唐話纂要	△(いかん)	△(いかに)	△(どう)	△	いかん	色・名・文・易・書・へ・言	日国なし	日国なし
団扇	ウチハ	唐話纂要	×	○	○	○	うちわ	和・色・名・下・文・伊・饅・黒・ 易・へ・言	だんせん	色・明・易・書・言
點頭	ウナヅク(頂頷)	唐音和解	○	○	○	○	うなづく	字・伊・易・書・へ	てんとう	言
扇子	アフキ	唐話纂要	○	○	○	○	おうぎ	明	せんす	文・へ・言
扇子	ヲフギ(扇)	唐音和解	○	○	○	○	おうぎ	明	せんす	文・へ・言
鉄漿	ヲハクロ	唐話纂要	△(かね)	△(かね)	○	○	おはぐろ	文	てっしょう	言
歩行	カチ	唐話纂要	×	×	○	○	かち	易・書	ほこう	色・文・伊・明・天・饅・黒・易・へ
剃刀	カミノリ	唐話纂要	○	○	○	○	かみそり	和・色・名・下・文・伊・明・天・ 饅・黒・易・書・へ・言	ていとう	伊
昨日	キノフ	唐話纂要	○	○	○	○	きのう	文・明・天・黒・易・書・へ・言	さくじつ	文・明・天・饅・易・書・へ・言
今日	ケフ	唐話纂要	○	○	○	○	きょう	色・名・易・書・へ・言	こんにち	文・易・書・へ・言
遮莫	ア(サ)モアラハアレ	唐話纂要	なし	△(さもあらば)	○	○	さもあらばあれ	色・名・文・饅・黒・易・書・言	日国なし	日国なし
仮令	タヒ	唐話纂要	○(たとへ)	○(たとへ)	○	○	たとい	色・名・文・黒・易・書・へ・言	けりよう	下・文・天・饅・黒・易・書
無恙	ツ・カナシ	唐話纂要	なし	なし	○	○	つつがない	【無レ恙】下・文・明・天・饅・ 書【无レ恙】伊・易【無恙】へ	むよう	なし※1
手巾	テノゴヒ	唐話纂要	なし	なし	○	○	てのごい	下・文・易・書	しゅぎん	易・書・へ・言
長刀	ナギナタ	唐話纂要	○	○	○	○	なぎなた	文・明・天・饅・黒・易・書・へ・言	ちやうとう	なし※2
剪刀	ハサミ	唐話纂要	なし	なし	○	○	はさみ	伊・へ	せんとう	なし※3
終日	ヒメモス	唐話纂要	×	○(ひねもす)	○(ひねもす)	○	ひめもす	色・伊・饅・へ・言	しゅうじつ	色・文・易・書・へ・言
当中	マンナカ	唐話纂要	なし	なし	△(た×なか)	△	まんなか	易	日国なし	日国なし
襪袢	ムツキ	唐話纂要	なし	なし	△(おむつ)	△	むつき	和・色・名・下・文・伊・饅・黒・ 易・書・言	きょうほう	色・伊・言
尋常	ヨノツネ	唐話纂要	なし	×	○	○	よのつね	色・名・下・伊・明・天・饅・黒・ 易・書	じんじょう	色・下・文・明・天・饅・易・書・ へ・言
終夜	ヨモスカラ	唐話纂要	○	○	○	○	よもすがら	色・文・明・天・饅・黒・易・書・ へ・言	しゅうや	文・書・へ・言

※1 漢語の『日国』初出：俳諧・夜半楽〔1777〕春風馬堤曲

※2 漢語の『日国』初出：浮世草子・鬼一法眼虎の巻〔1733〕一・三

※3 漢語の『日国』初出：経国集〔827〕一三・奉和搗衣引〈巨勢識人〉(漢文脈)

表② 漢語自体は古くから存在したが、既存の語彙の「あて字」として用いられるようになったもの（1／2）

唐話辞書における記述			CHJによる漢語の各コーパスの検索結果				日国による漢語の語釈または読み		日国による漢語の検索結果		
漢語	語釈	唐話辞書	洒落本	人情本	太陽	判定	日国検索語	表記欄 (日国検索語)	漢語読み	表記欄 (漢語で検索)	用例 のみ
冷笑	アサワラヒ	訳通類略	なし	○	○	○	あざわらう	×	れいしょう	文・言	
阿兄	アニ	唐話纂要	なし	なし	○	○	あに	×	あけい	なし(扶桑集[995~999頃])	○
許多	アマタ	訳通類略	○	なし	○	○	あまた	言	ぎよた	言(東寺百合文書[平安])	○
紙書	イカノボリ	唐話纂要	×	なし	○	○	いかなのぼり	書・へ	しえん	言(田氏家集[892頃])	○
疼痛	イタム	唐話纂要	なし	なし	○(いたみ)	○	いたむ	×	とうつう	なし(小右記[1027])	○
告別	イトマコヒスル	唐話纂要	なし	なし	○(いとまごひ)	○	いとまごい	×	こくべつ	なし(若木集[1377頃])	○
尊敬	ウヤマフ	唐話纂要	なし	なし	○	○	うやまう	×	そんけい	下・文	
怨恨	ウラム	唐話纂要	なし	なし	○(うらみ)	○	うらみ	×	えんこん	なし(万葉集[8C後])	○
教訓	オシエ	唐話纂要	なし	○	なし	○	おしえ	×	きょうくん	色・下・文・明・天・饅・黒・易・書・へ・言	
酒盃	ヲハラサカツキ	唐話纂要	なし	なし	△(さかづき)	△	おはらさかずき	なし	しゅはい	文	
堅固	カタヒ	唐話纂要	×	○	○	○	かたい	×	けんご	色・文・明・天・饅・易・書・へ・言	
這般	カヨウナ	訳通類略	なし	○	△(こな)	○	かよう	×	しゃはん	書・文	
争論	カラカフ	唐話纂要	なし	△(いさかひ、いひあふ)	△(いさかい)	△	からかう	×	そうろん	言(続日本紀[757])	○
酒瓶	カンナベ(間鍋)	唐音和解	なし	なし	△(どくり)	△	かななべ	×	しゅびん	なし(彦彦入明記[1538])	○
精神	キコン	訳通類略	なし	△(こゝろ)	△(こゝろ)	△	きこん	×	せいしん	書・へ・言(万葉集[8C後])	○
風雅	キヤシヤナ	唐話纂要	△(ものずき)	△(みやび)	×	△	きゃしゃ	×	ふうが	文・伊・明・天・饅・黒・書・へ・言	
去歲	キヨネン	唐話纂要	なし	なし	△(こそ)	△	きよねん	×	きょさい	書(田氏家集[892頃])	○
黑暗	クラヒ	唐話纂要	△(くらやみ)	△(くらやみ)	△(くらやみ)	△	くらい	×	こくあん	易	
黄昏	クレガタ	唐話纂要	△(ひのくれ)	△(くれ)	×	△	くれがた	×	こうこん	色・下・文・伊・明・天・黒・易・書・へ・言	
寡婦	ゴケ	唐話纂要	なし	○	○	○	ごけ	×	かふ	下・書・言	
婦婦	ゴケ	唐話纂要	なし	なし	△(やもめ)	△	ごけ	×	そうふ	【桑婦】伊	
低声	ヒキヒコエ	唐話纂要	なし	なし	△(こごゑ)	△	こごえ	×	ていせい	なし(正法眼蔵[1231~53])	○
爽快	コロヨイ	唐話纂要	なし	なし	△(さわやか)	△	こころよい	×	そうかい	なし(清北集[1346頃か])	○
今般	コノタビ	唐話纂要	△(こんど)	なし	×	△	このたび	書	こんばん	文・へ・言	
仔細	コマカ	訳通類略	×	△(わけ)	△(わけ)	△	こまか	×	しさい	易・書・へ・言	
這個	コレジャ(是)	唐音和解	なし	なし	△(かういふ)	△	これ	×	しゃこ	【這箇】文	
酒盃	サカツキ(盃)	唐音和解	なし	なし	○	○	さかつき	×	しゅはい	文	
寂寞	サビシヒ	唐話纂要	なし	×	△(ひつそり)	△	さびしい	書	せきばく	色・文・明・天・饅・黒・易・書	
寂寥	サビシヒ	唐話纂要	×	なし	○	○	さびしい	書・へ	せきりょう	色・文・明・天・饅・黒・易・書・へ・言	
沈吟	シアンスル	唐話纂要	なし	○	○	○	しあん	×	ちんぎん	色・文・へ	
祖父	ヂイ	唐話纂要	なし	○	○	○	じい	へ・言	そふ	下・易・書・へ・言	
祖父	ヂイ	唐音和解	なし	○	○	○	じい	へ・言	そふ	下・易・書・へ・言	
光景	シユビ(首尾)	唐音和解	△(ありさま)	△(ありさま)	△(ありさま)	△	しゅび	×	こうけい	色	
尋常	ヂヤウヂウ(常住)	唐音和解	なし	×	△(よのつね)	△	じょうじゅう	×	じんじょう	色・下・文・明・天・饅・易・書・へ・言	
工夫	シヨクニン(職人)	唐音和解	×	×	△(こうふ)	△	しよくにん	×	こうふ	書(続日本紀[784])	○
妓女	ジヨロフ	訳通類略	△(おやま)	○(ぢょうろ)	×	○	じょうろ	×	ぎじょ	文・伊・明・天・饅・黒・書・へ	
記号	シルシツクル	唐話纂要	なし	なし	○(しるし)	○	しるし	×	きごう	なし(正法眼蔵[1231~53])	○
親戚	シンルイ	訳通類略	なし	なし	△(みうち)	△	しんるい	×	しんせき	文・書・へ・言	
怠慢	フチヤウノコ	訳通類略	なし	△(ずるい)	×	△	ずるい	なし	たいまん	文・伊・明・天・黒・書・へ・言	
呪文	セイシ	唐話纂要	なし	なし	△(呪なひ・ごう)	△	せいし	×	じゅもん	書・言(内裏式[833])	○
小児	セラル	訳通類略	なし	△(こども)	△(こども)	△	せがれ	×	しょうに	文・書・へ・言	
小児	セガレ	唐話纂要	なし	△(こども)	△(こども)	△	せがれ	×	しょうに	文・書・へ・言	
昔日	ソノカミ	唐話纂要	なし	×(きのふ)	△(むかし)	△	そのかみ	書	せきじつ	へ(凌雲集[814])	○
許多	タクサン(薄山)	唐音和解	△(あまた)	なし	○	○	たくさん	×	ぎよた	言(東寺百合文書[平安])	○
奸計	イツリハハカシ	唐話纂要	なし	×	△(たくらみ)	△	たくらみ	なし	かんけい	へ・言(続日本紀[720])	○
風流	ダテナ	唐話纂要	×	△(みやび)	△(みやび)	△	だて	×	ふうりゅう	下・伊・明・天・饅・黒・易・書・へ・言	
譬喩	タトエハ	唐話纂要	なし	なし	○(たとへ)	○	たとえば	×	ひゆ	色・易	

表② 漢語自体は古くから存在したが、既存の語彙の「あて字」として用いられるようになったもの(2/2)

唐話辞書における記述			CHJによる漢語の各コーパスの検索結果				日国による漢語の語釈または読みの検索結果		日国による漢語の検索結果		
漢語	語釈	唐話辞書	洒落本	人情本	太陽	判定	日国検索語	表記欄 (日国検索語)	漢語読み	表記欄 (漢語で検索)	用例 のみ
快楽	タノシマシ	唐話纂要	なし	なし	△(たのしみ)	△	たのしい	×	けらく	文・饅・へ・言	
娯楽	タノシム	唐話纂要	×	○(たのしみ)	○(たのしみ)	○	たのしむ	×	ごらく	色・下・文	
消息	タヨリ	唐話纂要	なし	なし	○	○	たより	×	しょうそく	色・文・伊・明・饅・黒・易・書・ へ・言	
音信	タヨリ	唐話纂要	×(おとづる)	○	○	○	たより	×	いんしん	文・伊・明・天・饅・黒・易・書・ へ・言	
商議	ダンカウスル	唐話纂要	なし	なし	△(さうだん)	△	だんごう	×	しょうぎ	言(正法眼蔵随聞記[1235~38])	○
相公	ダンナサマ	訳通類略	△(かたさま)	なし	△(トノ)	△	だんなさま	なし	しょうこう	下・文・伊・易・書	
灯笼	テウチン (挑灯)	唐音和解	なし	なし	○	○	ちようちん	×	ちようちん	【挑燈】下学・文明・伊京・黒本・ 易林・書言・へ・ボン・言 海【挑 灯】明応・天正・饅頭	
謀計	チリヤク(知略)	唐音和解	△(はかりごと・ てごと)	なし	×	△	ちりやく	×	ぼうけい	色・文・饅・易・書・へ	
計較	テダテ	唐話纂要	なし	△(もくろみ)	×	△	てだて	×	けいこう	なし(宝覺真空禪師録[1346])	○
方便	テダテ	唐話纂要	○	○	○	○	てだて	書	ほうべん	文・饅・易・書・へ・言	
同胞	ドウフク	唐話纂要	なし	△(はらから)	△(はらから)	△	どうふく	×	どうほう	書・言(小右記[990])	○
年紀	トシ	訳通類略	なし	なし	○	○	とし	×	ねんき	易・書・言	
中間	ナカ	唐話纂要	なし	なし	○	○	なか	×	ちゅうげん	色・文・伊・明・天・饅・黒・易・ 書・言	
中央	ナカ	唐話纂要	なし	×	○	○	なか	×	ちゅうおう	文・明・天・易・書・へ・言	
旌旗	ハタ	唐話纂要	なし	なし	○	○	はた	×	せいぎ	下・へ・言	
閑話	ハナシ	唐話纂要	なし	△(むだばなし)	×	△	はなし	×	かんわ	文・易・へ	
鼻尖	ハナノサキ	訳通類略	なし	なし	△(はな)	△	はなのさき	×	びせん	なし(宝覺真空禪師録[1346])	○
祖母	ババ	唐話纂要	なし	○	○	○	ばば	へ・言	そば	下・書・へ・言	
祖母	ババ	唐音和解	なし	○	○	○	ばば	へ・言	そば	下・書・へ・言	
夜間	バンカタ	唐話纂要	なし	なし	△(よる)	△	ばんがた	なし	やかん	文	
曾孫	ヒマゴ	唐話纂要	なし	なし	○	○	ひまご	書	そうそん	色・伊・書・へ・言	
農夫	ヒヤクヤ(百姓)	唐音和解	なし	なし	○	○	ひやくしやう	×	のうふ	文・書・へ	
日中	ヒル	唐話纂要	なし	○	○	○	ひる	×	にっちゅう	色・易・書・へ・言	
怠慢	ブチャウハク	唐話纂要	なし	△(ずるい)	×	△	ぶちやうほう	×	たいまん	文・伊・明・天・黒・書・へ・言	
失礼	ブレイタシタ	唐話纂要	×	×	△(しつぺい)	△	ぶれい	×	しつぺい	文・へ・言	
財主	ブンゲン	唐話纂要	なし	△(かねもち)	×	△	ぶんげん	×	ざいしゅ	なし(律[718])	○
平常	ハイゼイ(平生)	唐音和解	△(じやうぢう)	なし	○	○	へいぜい	×	へいじよう	なし(文華秀麗集[818])	○
放肆	ホウラツナ	訳通類略	なし	なし	△(ほしいまま)	△	ほうらつ	×	ほうし	なし(経国集[827])	○
前頭	マエ	唐話纂要	なし	なし	△(ムカヒ)	△	まえ	×	ぜんとう	なし(延喜式[927])	○
枕頭	マクラ	唐話纂要	なし	なし	△(まくらもと)	△	まくら	×	ちんとう	なし(万葉集[8C後])	○
街衢	マチ	唐話纂要	なし	なし	△(ちまた)	△	まち	×	がいく	色	
道路	ミチ	唐話纂要	なし	なし	○	○	みち	×	どうろ	色・文・易・へ・言	
対面	ムカエ	唐話纂要	×	×	○(むかひ)	○	むかい	×	たいめん	色・文・天・饅・易・書・へ・言	
女兒	ムスメ	唐話纂要	なし	○	×	○	むすめ	×	じょじ	言(菅家文草[900頃])	○
小女	ムスメ	唐話纂要	×	△(こむすめ)	×	△	むすめ	×	しょうじょ	へ(言繼卿記[1568])	○
小女	ムスメ	訳通類略	×	△(こむすめ)	×	△	むすめ	×	しょうじょ	へ(言繼卿記[1568])	○
和睦	ムツマンヒ	唐話纂要	なし	△(なかなかほい)	×	△	むつまい	×	わぶく	下・書・へ・言	
悪心	ムネカハルイ	訳通類略	×	×	○(ムネワルキ)	○	むねわらい	なし	あくしん	文・易・書・言	
悪心	ムネノワルイ	唐話纂要	×	×	○(ムネワルキ)	○	むねわらい	なし	あくしん	文・易・書・言	
飯桶	メシツギ	唐話纂要	なし	なし	△(おはち)	△	めしつぎ	×	はんつう	なし(菅家文草[900頃])	○
仮面	メン	唐話纂要	なし	なし	○	○	めん	へ	かめん	書(延喜式[927])	○
平常	ヨノツネ	唐話纂要	×(じやうぢう)	なし	△(つね)	△	よのつね	×	へいじよう	なし(文華秀麗集[818])	○
歡喜	ヨロコブ	唐話纂要	なし	なし	○(よろこび)	○	よろこぶ	×	かんき	文・天・饅・黒・易・書・へ・言	
歡喜	ヨロコブ	訳通類略	なし	なし	○(よろこび)	○	よろこぶ	×	かんき	文・天・饅・黒・易・書・へ・言	
唐突	リヨグハイ	唐話纂要	なし	なし	△(だしぬけ)	△	りよがい	×	とうとつ	言(続日本後紀[836])	○
離別	ワカルハ	唐話纂要	×	○(わかれる)	×	○	わかれる	×	りべつ	色・文・黒・易・書・へ・言	

表③ 新しく入ってきた漢語が既存の語彙の「あて字」として用いられるようになったもの

唐話辞書における記述			CHJ による漢語の各コーパスの検索結果				日国による漢語の語釈 または読み込みの結果		日国による漢語の検索結果		全 CHJ による漢語の検索結果 および日国の近世以後の用例	
漢語	語釈	唐話辞書	洒落本	人情本	太陽	判定	日国検索語	表記欄 (日国検索語)	漢語読み	表記欄 (漢語で検索)	全 CHJ	日国近世以後
駄子	アホウ(阿房)	唐音和解	○	なし	なし	○	あほう	×	がいし	なし	×	○
怎生	ナントシタカ	唐話纂要	なし	△(いか(なる))	なし	△	いかなる	×	日国なし	日国なし	×	
打扮	イヨツキ・イデタ	訳通類略	なし	○(いたがいでた)	○(いでたち)	○	いでたち	×	だふん	なし	△	○
喫驚	オドロク	唐話纂要	なし	なし	△(びつくり)	△	おどろく	×	きつきよう	なし	△	○
吃驚	ヲトロク	訳通類略	なし	なし	△(びつくり)	△	おどろく	×	きつきよう	なし	×	○
側室	ヲヘヤ	唐話纂要	なし	なし	△(そばめ)	△	おへや	×	そくしつ	言	△	○
愚直	オロカモノ	唐話纂要	△(たはけ)	なし	なし	△	おろかもの	×	日国なし	日国なし	×	
傍辺	カタハラ	唐話纂要	○	×(あたり)	×(あたり)	○	かたわら	×	日国なし	日国なし	×	
仮髪	カツラ	唐話纂要	なし	なし	○	○	かつら	×	かはつ	なし	△	○
骨牌	角ノカルタ	唐話纂要	なし	なし	△(かるた)	△	かるた	書・へ・言	こっばい	言	×	○
煙管	キセル	唐話纂要	○	○	○	○	きせる	言	えんかん	なし	×	○
煙管	キセル	訳通類略	○	○	○	○	きせる	言	えんかん	なし	×	○
亡ハ	クツワ(轡)	唐音和解	なし	○	なし	○	くつわ	【忘ハ】書・へ	ぼうはち	【亡ハ・忘ハ】言	×	○
戯子	ゲイシヤ	訳通類略	なし	△(やくしや)	なし	△	げいしや	×	げし	なし	×	○
丫髻	ゲヂヨ	訳通類略	△(なかい)	なし	なし	△	げじよ	×	あかん	なし	×	○
今回	コノタビ	唐話纂要	なし	なし	○	○	このたび	×	こんかい	言	△	○
低語	サ・ヤク(私言)	唐音和解	なし	○	×(ルビなし)	○	ささやく	×	ていご	なし	△	○
清楚	サツハツシタ	唐話纂要	なし	なし	○(さつぱり)	○	さっぱり	なし	せいそ	なし	△	○
霎時	シバラク(片時)	唐音和解	なし	△(しばし)	○	○	しばらく	×	しょうじ	なし	△	○
三絃	シヤミセン	唐話纂要	○	なし	○	○	しゃみせん	×	さんげん	言	△	○
漏斗	シヤウゴ	唐話纂要	なし	なし	○	○	しょうご	言	ろうと	言	△	○
老実	シヤウジキ(正直)	唐音和解	なし	△(まじめ)	△(まめやか)	△	しょうじき	×	ろうじつ	なし	△	○
老実	シヤウヂキモノ	唐話纂要	なし	△(まじめ)	△(まめやか)	△	しょうじきもの	なし	ろうじつ	なし	△	○
審問	センキスル	唐話纂要	なし	なし	△(とらへ)	△	せんぎ	×	しんもん	なし	△	○
性急	タンキ(短気)	唐音和解	なし	なし	△(せつかち)	△	たんき	×	せいきゅう	へ・言	△	○
性急	タンキモノ	唐話纂要	なし	なし	△(せつかち)	△	たんきもの	なし	せいきゅう	へ・言	△	○
到底	ツマリ(様)	唐音和解	なし	なし	○(つまり)	○	つつまり	×	どうてい	書・言	△	○
那里	トコニ	訳通類略	なし	なし	△(いづく)	△	どこ	×	日国なし	日国なし	×	
周旋	トリナシラタノム	訳通類略	なし	なし	△(とらひ[つて])	△	とりもつ	×	しゅうせん	へ・言	△	○
渾家	ナイギ	唐話纂要	なし	△(つま)	なし	△	ないぎ	×	こんか	なし	×	○
銅鉄	ハカネ	唐話纂要	なし	なし	○	○	はがね	書	こうてつ	なし	△	○
梯子	ハシゴ	唐話纂要	なし	なし	○	○	はしご	言	ていし	なし	×	○
花灯	ハナトウロウ	唐話纂要	△(とうろう)	なし	×(シャンデリア)	△	はなどうろう	なし	かどう	なし	△	○
硝子	ヒイドロ	唐話纂要	なし	なし	○	○	びーどろ	書・へ・言	しょうし	言	△	○
抽斗	ヒキダシ	唐話纂要	なし	○	○	○	ひきだし	×	日国なし	日国なし	×	
只管	ヒタスラ(偏)	唐音和解	○	○	○	○	ひたすら	書・へ・言	しかん	なし	×	○
午飯	ヒルメシ	訳通類略	なし	なし	○	○	ひるめし	×	ごはん	言	△	○
連累	マキゾエ	唐話纂要	なし	なし	○(まきぞひ)	○	まきぞえ	へ	れんるい	へ・言	△	○
衆皆	ミナノ	唐話纂要	なし	なし	△(みんな)	△	みなみな	×		日国なし	×	
女婿	ムコ	唐話纂要	なし	なし	○	○	むこ	×	じょせい	なし	△	○
吩咐	モウシツケル	訳通類略	なし	なし	△(いひつけ)	△	もうしつける	なし	日国なし	日国なし	×	
款待	モテナシ	唐話纂要	なし	なし	○(もてなす)	○	もてなす	へ	日国なし	日国なし	△	
花街	ユウチヨマチ	訳通類略	△(くるは)	△(くるわ)	×(さか[り]ば)	△	ゆうじよまち	なし	かがい	言	△	○
準備	トノエソナユル	唐話纂要	なし	△(よういした)	×	△	ようい	×	じゅんび	【準備】言	△	○
青年	ワカザカリ(若社)	唐音和解	なし	なし	△(わかて・わかもの)	△	わかざかり	×	せいねん	言	△	○
不好	ワレイ	訳通類略	△(よからぬ)	なし	△(いや)	△	わるい	×	ふこう	なし	△	○
不好	ワルヒ	唐話纂要	△(よからぬ)	なし	△(いや)	△	わるい	×	ふこう	なし	△	○

注

- 1) 「あて字」の定義については、木村義之(2005)「あて字」『朝倉漢字講座1』、笹原宏之(2010)『当て字・当て読み漢字表現辞典』三省堂、田島優(2017)『「あて字」の日本語史』風媒社などに詳しい。本稿において扱う「あて字」は、「一寸(ちょっと)」のように、漢語の読みが字音にも字訓にも基づかず、漢語の意味に対応しているものを指す。「明日(あす)」のような、いわゆる熟字訓も含まれる。ただし「珈琲(コーヒー)」のような「仮借」によるものは一般的にイメージされる当て字ではあるが、今回は含まなかった。
- 2) 銭谷真人(2023)「読本における『あて字』の発生と伝播について」『鎌倉女子大学紀要』第30巻(p 35-48)
- 3) 白話語彙を厳密に定義することは非常に難しい。どの時代からの中国語を白話(口語)とみなすのか、また古語であっても白話小説によって日本に広まったものであれば白話語彙とみなすのかなど、様々な考え方がある。本稿でも参照した張海燕(2017)『「古今奇談英草紙」と白話語彙』(勉誠出版)においては「第一章 白話の概念をめぐる」(p 1-28)において厳密な定義を試みている。本稿においては便宜的に「白話語彙」として、「唐話辞書に掲載されている近世以降に日本に流入した漢語」と定義している。
- 4) 張(2017)において「〈41〉花街(いろざと)〔花街(くるわ)〕」(p 114)として『「英草紙」が初出例である白話語彙』の内「語の出自が唐・宋・元である『英草紙』白話語彙」に分類されている。
- 5) 今回の調査で使用したCHJのバージョンは以下の通りである。
 国立国語研究所(2019)『日本語歴史コーパス 江戸時代編Ⅰ 洒落本』
<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html#share>
 (Ver.1.0)
 国立国語研究所(2019)『日本語歴史コーパス 江戸時代編Ⅱ 人情本』
<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html#ninjo>
 (Ver.0.8)
 国立国語研究所(2019)『日本語歴史コーパス 明治・大正編Ⅰ 雑誌』(短単位データ 1.2)
https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/meiji_taisho.html#zasshi
- 6) 小田切文洋(2008)『江戸明治 唐話用例辞典』笠間書院
- 7) 長澤規矩也編『唐話辞書類集』第六集・第八集(1972)第十八集・第十九集(1975)、汲古書院
- 8) 『唐音和解』における二字漢語とその注釈としての漢語の対応については、陳力衛(2005)「近世漢語の重層性について—対訳資料『唐音和解』(一七一六)を中心に—」『国語語彙史の研究24』(和泉書院)に詳しい。
- 9) 2010年11月30日に平成22年内閣告示第2号として告示された「常用漢字表」の付表には「いわゆる当て字や熟字訓など、主として1字1字の音訓としては挙げにくいものを語の形で掲げた」として一部の熟字訓が掲載されている。
- 10) 「周章」や「點頭」を白話語彙とみなす考え方を否定するものではない。あくまで本稿で定義する「白話語彙」には当てはまらないということである。
- 11) 銭谷真人(2023)「近世近代における『あて字』と『熟字訓』—人情本の漢字表記を中心に—」『コーパスによる日本語史研究 近世編』(ひつじ書房)において「『熟字訓』として通用していた可能性が高い」(p 108)ことを指摘した。
- 12) 注2に同じ。
- 13) 今野真二(2020)『振仮名の歴史』(岩波現代文庫版)では、曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』における「主意(ふんべつ)」という「あて字」の使用について、「『フンベツ』はおそらく漢語らしさをもうあまり保っていなかった」(p 107)と指摘している。漢語と意識されない漢語に別の漢語を「あてる」ことが読本においても行われていたのである。

- 14) 張 (2017) において「〈19〉女婿 (むこ)」(p 71~72) として『英草紙』が初出例である白話語彙」の内「語の出自が南北朝以前である『英草紙』白話語彙」に分類されている。
- 15) 張 (2017) において「〈145〉午飯 (ごはん・ちゅうじき※左ルビ)」(p 322~324) として「語の出自が唐代以降である『英草紙』白話語彙」の内「日本近世に受容されたとみられる白話語彙」に分類されている。
- 16) 張 (2017) において「〈28〉連累 (まきぞへ)」(p 85~87) として『英草紙』が初出例である白話語彙」の内「語の出自が南北朝以前である『英草紙』白話語彙」に分類されている。
- 17) 注11の銭谷 (2023) では、近代において「あて字」から現在の「通常表記」へとシフトしていったのではないかということを検証したが、その原因を考察するまでには至っていなかった。

要旨

本稿においては、唐話辞書に掲載されている漢語の語釈から発生したと考えられる近世近代の「あて字」について調査を行った。その結果、やはり唐話辞書の語釈が漢語の「振り仮名」として用いられている「あて字」が近世近代には見られた。ただ「あて字」として用いられている漢語は、近世になってから日本に流入してきた新しい漢語だけではなく、古くから日本で「あて字」として用いられてきた漢語や、漢語自体は日本語の古い文献においても見られるものも含まれていた。それらは新しく入ってきた漢語とともに、唐話辞書において紹介され、「字音語」ではなく「あて字」としてその後の日本語の中に定着していったことが考えられた。

付記

本稿は JSPS 科研費「近世日本語における『あて字』の発生と近代日本語への伝播」(JP 18 K 12406) の研究成果の一部です。

(2024年9月11日受稿)